藤原為家と阿仏尼との和歌の贈答に関する一考察

田辺麻友美

はじめに

『十六夜日記』などの作品を遺し、藤原定家の嫡男・為家との間に生まれた息子・為相を和歌の家の跡取りにふさわしく育てることに心を砕いた阿仏尼。彼女が為家と知己になり、恋愛関係を経て同居するに至った経緯は、詳しくはわかっていない。彼らが親しくなった経過を知るための唯一の資料と言っても良いのが、『玉葉和歌集』および『風雅和歌集』に載る、五組十首の為家と阿仏尼との和歌の贈答である。彼らが関わりを持つようになったのは、阿仏自身が為家の五七日追善法要に記した『阿仏仮名諷誦』において、「歌の道を助け仕へしこと、廿年余り三年ばかりにもやなりにけむ」[注1]と言っていること、また、『源承和歌口伝』の次の一節、「阿房為相朝臣母安嘉門院越前とて侍りける、身を捨てて後奈良の法花寺に住みけり。後に松尾慶政上人のほとりに侍りけるを、源氏物語かかせんとて、法花寺にて見慣れたる人のしるべにて、院大納言典侍二条禅尼もとにきたれり。続後撰奏覧（稿者注、建長三（一二五一）年十月又は十二月）之後事也。年月をおくりて、定覚律師をうめり。誰が子やらんにて侍りしほどに、はるかにして為相をうめり。」[注2]などによって考えれば、為家の没年、建治元（一二七五）年から逆算して、建長四（一二五二）年頃よりだと思われる。建久九（一一九八）年生まれの為家は、建長四年には五十四歳、かたや貞応元（一二二二）年頃の生まれと推定される[注3]阿仏は、三十歳前後だったはずであろう。およそ二十余歳離れた二人を結びつけた最大のきっかけは、前掲『源承和歌口伝』などより、阿仏が一時身を寄せていた法華寺で知り合った人の紹介で、為家女のもとを『源氏物語』書写のため訪れたからだと考えられている。この事実をもって、阿仏尼は若い頃より、『源氏物語』への造詣が深い人物としてその名を世に知られていたことがわかる。交際当初は、阿仏のもとに為家が通う仲だったようである。その後、二人の間の最初の子、定覚が生まれるが、生誕当時には阿仏へ他に通う男がいたようで（「誰が子やらんにて侍りしほどに」）、彼は仏門に入れられる。当時、父親がはっきりしない子は、仏門に入れられるのが常であったらしい。後年為家は、阿仏尼宛の譲状で、「をのこ子三人うみて」と記し、この定覚も自身の子と見なしているが[注4]。父親が誰か、という風評

がたつ状況下なので、少なくとも定覚生誕時には、阿仏尼と為家は同居していなかったはずである。そして、弘長三（一二六三）年に為相、文永二（一二六五）年に為守が生まれる。父親の名を一字取って息子につけていることより、この頃には阿仏尼は為家側室としての地位が定まっていたと思われる。また、二人が同居をはじめたのも、この前後からかもしれないが、明確に特定できていない。ただ、飛鳥井雅有の文永六（一二六九）年の日記である『嵯峨の通ひ』には、為家の中院山荘に阿仏尼が同居して、『源氏物語』を御簾の内より講釈し、「女あるじ」と呼ばれた記事が見える。

十七日、昼ほどに渡る。源氏はじめんとて、講師にとて、女あるじをよばる。すの内にてよまる。まことに面白し。よの常の人のよむにはにず、習ひあべかめり。[注5]

この記事によれば、当時は二人が仲睦まじく暮らしていた事実がわかる（傍線は稿者による）。従って、別々に暮らす二人の間に歌の贈答があったのは、建長四（一二五二）年頃より、遅くとも十八年の間、ということになろう。岩佐美代子氏は、「文永元（一二六四）年より、為家は父・定家伝来の嵯峨の山荘に住んでいた」[注6]とお考えで、このご見解に従えば、為守生誕時には二人は同居していた可能性も出てこよう。また、佐藤恒雄氏は本贈答について、一組目の贈答に見える「時雨」の語に着目され、建長五（一二五三）年冬は為家が関東へ頻繁に出かけていることより、贈答は建長四年とお考えだが、[注7]二組目以降の贈答に季節を表す語のないことより、稿者は、現段階では特定年を挙げることは控えたい。

先学のご研究には、『玉葉集』と『風雅集』の注釈書以外にも、本贈答を紹介したものを見ることができる。[注8]内容については、「（稿者注、為家の）阿仏との恋歌なんて情緒纏綿として大したもの」という岩佐美代子氏の発言におおむね代表されるように、[注9]情熱溢れる恋歌、という位置づけが定着している。だが、それらのご研究では、贈答の基をなす古典教養などについての言及が少ない。あっても、「二人の文学的教養や気持ちの通じ合いが読み取れる」[注10]といった文言で、詳細なものではない。だが、この十首については、心情面のみならず、教養面からの考察も必要ではないだろうか。本稿では、その二人の同居以前の贈答歌について考察を試み、二人が仲睦まじく同居するに至った過程、ひいては為家と阿仏尼の歌論などとの関連を考える一つの手がかりにしたい。

一

前述のように、為家と阿仏尼との贈答歌は、『玉葉集』と『風雅集』の恋部に収載されている。[注11]これらは全て、為家の歌も阿仏尼のそれも、他の資料には収められていないため、他では見ることが不可能である。また、彼らの入集歌の大部分は題詠歌であり、実際の体験に基づく和歌として貴重な存在になっている。『玉葉集』で為家が他人と贈答したものは全五十一首中五首、阿仏は十一首中二首。『風雅集』では為家二十六首中三首、阿仏十四首中三首である。贈答の順は未詳であるので、本項では『玉葉集』収載の和歌より見ていきたい。なお、全て、これらは為家より阿仏尼に贈った形をとっている。

暁の時雨に濡れて女のもとより帰りて、あしたにつかはしける　前大納言為家

帰るさの東雲暗き村雨も我が袖よりや時雨そめつる

返し　安嘉門院四条

後朝の東雲暗き別れ路に添へし涙はさぞしぐれけむ

（巻十二・恋二・1456・1457）

これは、一組目、後朝の贈答である。ただ、この贈答時が初めての逢瀬かどうかはわからない。この巻の全百二十四首中、実体験の恋歌は十五首（詞書に「題知らず」とある歌は、出典作品での詞書が実際の恋の場面での詠作であっても、この数には含めていない。本稿では、以下に勅撰集の恋歌を数える場合、同様の手法を取ることとする）であるので、そのうちの二首[注11]ということになる。だが、その十五首はほとんどが平安朝の歌人のものであるため、当代に近い歌人の恋歌として、珍しい存在となっている。その為家の詠歌は、実景を踏まえた非常にロマンティックな内容である。これは、

左大将朝光、女のもとに罷れりけるに、悩まし、帰りね、と言ひければ、帰りて朝、女のもとより遣はしける　よみ人知らず

雨雲のかへるばかりの村雨にところせきまでぬれし袖かな

（『後拾遺集』巻十二・恋二・687）

と、詠まれる素材や後朝の情景が類似している。この歌では、実景と自身の心情がオーヴァーラップするように詠まれているが、同様に、為家の贈歌は実景に基づく恋歌なのである。また、為家には次のような歌も存在する。「かへるさの秋の名残や惜しむらん時雨がちなる有明の月」（『為家集Ⅰ』755）。阿仏尼が為家から歌をもらった際、この『後拾遺集』歌や為家歌が念頭にあったかどうかは定かではないのだが、返歌の「後朝」の一語で、これらに流れる叙情たっぷりの内容を受け止め、そして、唱和する形で、明け方の時雨に濡れて帰った、為家を細やかに思いやっている。二人の熱い思いが感じられる贈答である。なお、この返歌に関しては、『玉葉和歌集全注釈』（中巻・P288）は、「しののめのほがらほがらと明けゆけばおのがきぬぎぬなるぞ悲しき」（『古今集』恋三・637・題知らず・よみ人知らず）を参考歌として挙げている。

さて、この『玉葉集』には、もう一組二人の贈答が収められている。この巻は一読すればわかる通り、「つかはしける」という詞書を持つ歌が多く収められており、全百十八首のうち四十六首を実体験に基づく恋歌が占めている。ただし、当代歌人のそれはやはり少ない。[注11] それらはまず四季の順に配列され、それが一巡すると、題詠歌や四季を暗示する内容のない歌が置かれている。

嘆くことありてこもり居て侍りける人のもとに遣はしける　前大納言為家

大方のさらぬならひの悲しさもある同じ世の別れにぞ知る

返し　安嘉門院四条

はかなさはある同じ世もたのまれずただ目の前のさらぬ別れに

（巻十四・恋二・1688・1689）

この贈答は四季を示す言葉がない故、巻の後半に位置されて

いるのだろう。

ここにおいて注目されるのは、「さらぬならひ」である。この表現は意味的には「避けられぬ習慣」で、死を暗示しているのであろうが、他に、為家の文応元（一二六〇）年から翌年にかけての『五社百首』での賀茂社への歌（640）、「たらちねのさらぬならひにとりそへて我さへあやな別れにしかな」や、「吹く風のさらぬならひも忘られて千代をも嘆く花のかげかな」（『続古今集』春下・109・鷹司院按察）など以外に例を見いだせない。おそらく、為家が阿仏尼の悲しさを遠回しに思いやって用いた句であるのだろう。彼女より二十余歳ほども年長で、何度もこの悲しみを味わってきた者らしい、余裕のある態度で彼女を包み込んでいこうという感がある。だが、阿仏歌は、悲しみに沈みつつも、「この世のはかなさは、たとえあなたであっても頼りになるようなものではありません。ただ、避けられぬこの目の前の別れが、私は耐え難くつらいのです」との内容になっている。ここでは、彼女の宮廷女房らしい才知と気丈さが見られる。「さらぬ別れ」は、『古今和歌集』での業平母と業平との贈答、「老いぬればさらぬ別れのありといへばいよいよみまくほしく君かな」、「世の中にさらぬ別れのなくもがな千代もと嘆く人の子のため」（雑上・901・902）以来、頻繁に詠まれる句である。ちなみに、阿仏自身は、後に為家の死後に詠んだ百首で、「悔しくぞさらぬ別れに先立ちてしばしも人に遠ざかりける」（『風雅集』雑下・2016）とも詠んでいる。

この詞書では誰かはうかがい知れないが、阿仏は、この直前に肉親の死に会っているのだろう。稿者は、同じく『玉葉集』収載の「母の思ひに侍りける頃、安嘉門院四条子におくれて侍るよし聞きて遣はし侍りける」との詞書を持つ、「変はらじな消えにし袖の名残とて袖干しわぶる秋の思ひは」（雑四・2431・中務卿宗尊親王家三河）という、宗尊親王家の女房の歌との関連を考えている。この歌の詞書で阿仏が「子におくれて」とあるのは（為家との間の子に先立たれた記事が見えないため）、為家以外との間の子どもを指すと思われる。[12] この歌と当該贈答との前後関係が不明なため、これ以上の言及はできないが、阿仏は為家らと共に文応元（一二六〇）年に『宗尊親王三百首』で合点を付けていることもあり、宗尊親王とその周囲の歌人との関わりは重要であろう。

以上二組が、『玉葉集』で見られる為家と阿仏尼との贈答である。両者とも、平安文学の教養にのっとっているが、前者は情熱的、後者は悲しみあふれる内容になっている。両者で見られる内容は、この贈答が行われた時点での二人の関係を暗示してはいないだろうか。もし、この贈答があった当時、二人の仲が大変に親密で、為家に正妻がいても、全面的に阿仏が彼を信頼できる間柄であったのならば、為家の和歌にいつも相応の唱和をしたことであろう。『公卿補任』によれば、為氏らの母は、阿仏が鎌倉へ下向した弘安二（一二七九）年に亡くなったとの記事があるので、当然この贈答当時も存命していたはずである。[13] だが、彼女はそのような返歌をしていない。彼女の返歌の内容は、あるときは情熱的、またあるときは悲観的、と、まさに恋の初期の段階の典型的とも言えるものである。それは、確かにお互いの気持ちが歩み寄るのを感じつつも、まだかけひき

が必要なことを意味している。従って、この時点で、二人の間柄は親しくはあるものの、まだまだ心の全てをかけて信じあうほどのものではない、と言えるだろう。

ところで、なぜ、この二組の贈答歌が、この勅撰集にのみ収載されているのだろうか。稿者は、それには二つ理由があると考えている。まずは、この歌集の撰者が京極為兼であること、である。為家は『玉葉集』で五十一首もの歌を採られており、これは、伏見院（九十三首）、定家（六十九）、西園寺実兼・従二位藤原為子（六十）、俊成（五十九）、そして、西行（五十七）に次ぐ数字となっている。[注14] だが、この五十一首のうち、典拠を確認し得ないものが二十五首もある。[注11] この原因は、『玉葉集』撰進の正和元（一三一二）年当時には、現在は散逸する資料が存在していたことも当然考えられよう。また、それ以外の可能性としては、安井久善氏の、次のような意見が注目される。安井氏は、「為兼が玉葉集を撰進するにあたって使用した資料は、少なくとも為家に関する限り、歴代勅撰集の撰進に使用された資料、従来の言はばありふれたものを避けて、全く別の資料、即ちおぼつかさに云へば門外不出の、或いは為兼だけに伝へられた歌反古等によった部分が多かったのではなからうかといふことを想はせる」[注15] としておられる。稿者も、為兼が撰者、という点には着目しても良いのではないかと考えている。二条家への敵愾心もあって、冷泉家は京極家と阿仏尼存命の頃より親しかったようである。それは、『十六夜日記』に阿仏尼と為兼との贈答（「故郷は時雨にたちし旅衣雪にやいとど冴え勝るらむ」、「旅衣浦風冴えて神無月しぐるる雲に雪ぞ降りそふ」）が収められていることよりも明らかである。[注17] 従って、為兼が勅撰集撰進にあたっては、家をあげた大事業であるため、冷泉家より貴重な資料を借りたこともあったかもしれない。

こういった点に関しては、冷泉家より新資料が登場する可能性もあるので、今すぐ結論を求めず、稿者の今後の論考課題にしたい。

二

本項では、『風雅集』収載の三組の贈答歌を見たい。この勅撰集では、全て巻十一・恋二に二人の贈答が収められている。この巻の全九十七首のうちでも、題詠歌がその多数を占め、実際の恋の場面での歌は十首のみしかない。その中で、二人の贈答、計六首は、大変際だった存在であると言えよう。[注11] 最初の贈答は、次の通りである。

女とよもすがら物語してあしたに言ひつかはしける　前大納言為家

生きて世の忘れ形見となりやせむゆめばかりだにぬともなき夜は

返し　安嘉門院四条

あかざりし闇のうつつを限りにてまたも見ざらむ夢ぞはかなき

（巻十一・恋二・1096・1097）

この贈答は、後朝のものである。つまり、『玉葉集』の最初の贈答と同じである。為家は、これも『玉葉集』でのもの同様、大変叙情的で、熱い思いを詠んでいる。この贈答で為家が用い

た「忘れ形見」は、「飽かでこそ思はむ仲は離れなめそをだに後の忘れ形見に」（『古今集』巻十四・恋四・721・題知らず・詠み人知らず）が初例であるのだが、そこでの意は「別れがたい思いを（会わなくなって後の）忘れ形見にする」、というものであり、やや為家の用いた意のものとは、ずれがあるように思われる。次田・岩佐両氏は、これを本歌の参考として頭注に挙げておられるが[注18]、むしろ、稿者は、勅撰集においてその次の使用例となる、「恋てへむと思ふこころのわりなさは死にても知れよ忘れ形見に」（『後撰集』巻十二・恋四・821・「つらかりける人のもとにつかはしける」・伊勢）や、『源氏物語』手習「いふかひなくなりにし人よりも、この君の御心ばへなどのいと思ふやうなりしを、よそのものに思ひなしたるなむ、いと悲しき。など忘れ形見をだにとどめたまはずなりにけん」と、恋ひ偲ぶ心なりければ、たまさかに、かく物し給へるにつけても、珍しく、あはれに、思ゆべかめる問はず語りも、し出でつべし。」（五・P362）に見られる、「（死んだ後、自分が忘られぬよう残す）忘れ形見」の意と、「逢ふと見てことぞともなく明けぬなりはかなの夢の忘れ形見や」（『新古今集』巻十五・恋五・1387・家隆）の、「（夢での逢瀬の）忘れ形見」を、ある程度意識して詠まれたものではないかと考える。「忘れ形見」といえば、前者の意が普遍的なものであるのだが、家隆のこの詠歌により、このような意も与えられたのである。為家の贈歌は、この両者の意の「忘れ形見」を詠み込み、また、「ゆめ」には名詞の「夢」と、副詞の「ゆめ」を掛けている。これらの技巧によって、より一層この歌に対する思い（つまりは、阿仏に対する恋の思い）が高められている。更に、『長恨歌』の「悠悠生死別経年、魂魄不曾来入夢」[注19]の類想歌であるとも想定できよう。『玉葉集』最初の二人の贈答も後朝のものであったが、本贈歌は、その際のものよりいちだんと技巧に富み、かつ、ロマンティックな内容となっている。

それに対する阿仏尼の返歌は、まず初句で二人で過ごす夜の短さを嘆いている。そして、「むばたまの闇のうつつはさだかなる夢にいくらもまさらざりけり」（『古今集』巻十三・恋三・647・題知らず・よみ人知らず）や、『源氏物語』桐壺、「野分だちて、にはかに肌寒き夕暮の程、常よりも、おぼし出づること多くて、靫負命婦といふをつかはす。夕月夜のをかしきほどに、いだし立てさせたまひて、やがてながめおはします。かやうのをりは、御遊びなどせさせ給ひしに、心ことなる、物の音をかき鳴らし、はかなく聞こえ出づる言の葉も、人よりは殊なりしけはひ・かたちの、面影につと添ひて思さるるにも、闇のうつつには猶劣りけり。」（一・P34）などによる、「おぼろげな現実（での逢瀬）」の意、「闇のうつつ」という句を続けることで、その夜の短さを強調させている。

こういった、勅撰集の恋部や物語の恋の場面での「闇のうつつ」という句は、これらの後には目だった用例がなく、『新古今集』時代まで存在を見ない。その頃になって、「郭公闇のうつつの一声は思ひもわかぬうたたねの夢」（『正治初度百首』「夏」忠良・731）、「思ふどち夜半の埋み火かきおこし闇のうつつにまとゐをぞする」（『建礼門院右京大夫集』193）、「束の間の闇のうつつもまだ知らぬ夢より夢に迷ひぬるかな」（『式子内親

王集』「恋」78)、(「むばたまの闇のうつつの鵜飼舟月の盛りや夢も見るべき」(『壬二集』831)、「さりともと頼むもかなしむばたまの闇のうつつの契りばかりを」(『新勅撰集』恋三・837・題知らず・藤原永光)、「恋しさの勝る嘆きは夢ならでそれとだに見ぬ闇のうつつよ」(『定家』287)などに例を見いだせるようになる。

また、この、「闇のうつつ」を用いた歌が、『為家千首』にも「今はまた誰が見し夢に慰めて闇のうつつの限りなりけん」(「恋」3093)として存在する。

この歌では阿仏歌同様に、「闇のうつつ」と「限り」とが歌われている。「闇のうつつ」との句を詠んだ詠はいくつかあっても、「限り」が同時に詠まれたものは他に確認できなかった。この、貞応二(一二二三)年の、個人千首の最古とされる『為家千首』は、二十六歳の為家の進路を決定づけた和歌であり、おそらく阿仏尼も当該歌を詠む頃までに目に入れていたのではないか。阿仏尼の念頭には、この為家詠があった可能性も大いに考えられよう。また、これに加え、阿仏尼の詠歌では為家の贈歌の「ゆめ」との対応もさせている。この返歌より読み取れる彼女の心境は、「あかざりし」などの句により、大分為家に気持ちが傾いているように稿者には思える。

続いての『風雅集』での贈答を見たい。

女のもとにあからさまに罷りて物語などして、たち帰りて申し遣はしける　　前大納言為家

まどろまぬ時さへ夢の見えつるは心にあまる行き来なりけり

返し　　安嘉門院四条

魂はうつつの夢にあくがれて見しも見えしも思ひわかれず

(巻十一・恋二・1101・1102)

前組に続いて、夢が贈答のテーマになっている、逢瀬の後の歌である。為家は、阿仏尼のもとにちらりと立ち寄って語った後に、女心に一途に訴えかける恋の歌を贈っている。

この贈歌に対する阿仏の返歌も、為家を恋う熱い思いに満ちている。当該歌の「うつつの夢」という句は、もともと「見る夢のうつつになるは世の常ぞうつつの夢になるぞ悲しき」(『拾遺集』巻十四・恋四・920・題知らず・よみ人知らず)に由来するものである。これは「夢」と「うつつ」という対比される言葉を並べた内容であるので、直接的には阿仏歌には影響がないと思われよう。この「うつつの夢」という句は、『新古今集』時代になって多く摂取が見られるようになったもので、有名なものとしては、「逢ふと見て醒めにしよりもはかなきはうつつの夢の名残なりけり」(『洞院摂政家百首』「後朝恋」・1276・俊成卿女、『続後撰集』恋四・883にも重出)、「さぞ嘆く恋をするがの宇津の山うつつの夢のまたと見えねば」(『続後撰集』巻十四・恋四・888・題知らず・定家)などがある。『拾遺集』歌が恋部に収められているため、摂取歌も恋の題詠が多いが、歌の内容より「夢」や「夜」題などでの詠歌も見られる。これらの詠歌の中で、阿仏歌に直接の影響関係がある歌は見えなかったが、最も近い内容を歌ったのは、「現実での逢瀬が、夢のようにはかない」という、俊成卿女歌でないだろうかと思われる。だが、これ以外に阿仏尼歌との関係を稿者が特に挙げたいのは、

宗尊親王の歌集に見える、「憂きことをかく見むとてや覚めやらぬ現の夢に迷ひ初めけむ」（『宗尊親王III』300）、「なにとあるうつつの夢ぞ寝るがうちは同じ昔のことも見ゆるに」（『同IV』824）である。両者の歌題は順に、「述懐」と「雑」であり、阿仏歌への直接の影響は少なそうなのだが、この歌集成立に大きく関与している人物のことをここでは考慮に入れたい。宗尊親王のこの二つの私家集には、為家が、合点と評をつける、という形で関わっているのである（当該二首には、いずれもつけられていない）。これら、宗尊親王の歌集に含まれる歌は、前者が、文永二（一二六五）年春より同四（一二六七）年、後者が文永三（一二六六）年葉月より同九（一二七二）年霜月の詠作とされている。この頃、前出の通り、為相と為守が生まれており、阿仏尼は為家の側室として、その存在を公に認められるものとなっていた。従って、おそらく彼女は（もともと秘書的役割として呼ばれたのだし）為家の仕事の状況を知っていたはずである。この歌集編纂を為家がしていた頃と、二人の当該贈答歌が詠まれた頃とどちらが前後するか分からない故、両者の影響関係の指摘は困難で、これ以上のことは論じられない。だが、前述の通り、為家と共に阿仏自身も『宗尊親王三百首』に合点をつけているなどのこともあり、この宗尊親王と為家、阿仏尼との関係を考慮に入れておく必要はあるだろう。

では、最後の贈答を見たい。前の贈答との間は、一首しかあいていない。

女のもとへ、近き程にあるよしおとづれて侍りければ、

今宵なむ夢に見えつるは塩釜のしるしなりけりと申して侍りけるに遣はしける　前大納言為家

聞きてだに身こそ焦がるれ通ふなる夢のただぢのちかの塩釜

返し　安嘉門院四条

身を焦がす契りばかりかいたづらに思はぬ仲のちかの塩釜

（巻十一・恋一・1104・1105）

詞書より、この贈答がなされる前に、二人の間で交渉があったことがわかる。為家が、「近くまで来ている」と阿仏尼に告げ、それに対し彼女から「今宵私の夢にあなたが出られたのは、『塩釜のしるし』だったのですね」との返事があった、というものだ。

ここでもまた阿仏は平安文学の素養を示している。「ちかの塩釜」がこれに該当する。「ちかの浦」とも言われる当地は、「陸奥のちかの塩釜近ながら遙けくのみも思ほゆるかな」（『古今六帖』第三「しほがま」・1799・伊勢）など、古くから「近し」と掛詞で歌われることが多かった。従って、阿仏も、為家が「近くにいる」と言ったため、「今夜の夢にあなたが現れたのは、近くにおいでになる、という意味の『ちかの塩釜』だったのですね」そう呼応したのである。このやりとりにのっとって、本贈答はなされている。

阿仏尼の見せた素養に対し、為家は「夢のただぢ」という、これもまた平安文学による句を盛り込んで歌を返している。「恋ひわびてうちぬるなかに行き通ふ夢のただぢはうつつならなむ」である（『古今集』巻十二・恋二・558・藤原敏行、『古今六帖』第四「夢」・2031に重出）。これも、「逢はぬ夜も逢ふ夜も

いをしまだねねば夢のただぢはなれやしぬらむ」（『躬恒集Ⅰ』379など重出）等を除けば、前贈答の「うつつの夢」の語を詠んだ句と同様、『新古今集』時代に入って多く受容が見られるようになったもので、「枕だに定めもやらぬ春の夜の夢のただぢぞ猶もはかなき」（『壬二集』・大僧正四季百首「夜」・1170）「まれにだに逢ふよしをなみぬばたまの夢のただぢに迷ひぬるかな」（同・為家卿家百首・恋廿五・973）などの詠、また、「白露のおくとは嘆くとばかりも夢のただぢやこと通ふらん」（『拾遺愚草』・関白左大臣家百首「忍恋」・1454）、「風騒ぐ萩の葉避くとうきて見し夢のただぢぞいやはかなる」（同・内裏秋十五首歌合「秋夢」2257）、「見しは皆夢のただぢにまがひつつ昔は遠く人は還らず」（『拾遺愚草員外』無常十首・3285）などがある。これら私家集のみでなく、「さめぬ夜の夢のただぢをうつつにていつを限りの別れなるらむ」（『松浦宮物語』橘氏忠・巻五・P172）、「問はばやなそれかと匂ふ梅が香に再び見えぬ夢のただぢを」（P199）など、そして、「驚かす鐘につけてぞ思ひ知る憂きに迷へる夢のただぢは」（『恋路ゆかしき大将』帥宮姫君・巻三・P290）などの形で歌われてもいる。『古今集』の詠歌が恋歌であったため、それを意識しての歌（物語での作中人物詠）と、句の言葉に従って「夢」題（一字題、結題のいずれも）での歌とがあるようである。本贈答は、もちろん前者の系統に含まれるもので、二人の熱い思いがはっきり表れている。この後、二人は為家の中院山荘で同居をするのに、長い時間を要しなかったのではないだろうか。

このように『風雅集』での阿仏尼と為家の贈答を見ていると、「夢」が一連の主題になっていることがわかる。そして、まさにこの三組の贈答の含まれる1095（従二位為子）より1105までの一群は、「夢」が詠み込まれているのだが、この三組以外は「夢での逢瀬」の悲しさや切なさを詠んだものが多い。例えば、「うき中のそれをなさけに有りしよの夢を見きとも人に語るな」（『忍逢恋といふことを」・1095）、「ぬるがうちに逢ふと見つるも頼まれず心の通ふ夢路ならねば」（題知らず・1103・法印長舜）などである。その中で為家と阿仏尼の贈答歌群は、恋の悲哀を詠んだ歌と比較した時、より熱愛ぶりが際だって見え、それはまるで王朝の恋の物語を見ているようだと言うことが可能だろう。

おわりに

こうして、二つの勅撰集における、五組の為家と阿仏尼の贈答を見てみると、これらはほぼ二人の恋の進展の順に並んでいることが明らかになった。才知が溢れ、かつ情熱に満ちたこれらの贈答は、二人の恋の進展を物語るには充分すぎるほどである。これらの歌の贈答の中で、二人は互いの思いを燃やしていったのだろう。阿仏の返歌（特に『風雅集』収載のもの）については、長崎健氏が「贈答歌の条件というべきであろう、即詠性、贈歌との語句・表現の対応性、いなしと言うべき主題の増幅性のそれぞれの性格を備えられているもので」[注20]と論じておられることも付記したい。

また、このような贈答の興趣を、のちに阿仏は「又とりあへぬことに時も変らず詠みいづる歌の返し、たちながらいひいだ

す歌はさしあたりてただ今言ひたきことをさま良く続け候ぬれば何の風情にも過ぎて候。小式部内侍、定頼中納言を引きとどめて、『まだふみも見ず天の橋立』と申しけることや、周防内侍、忠家大納言と、『かひなく立たむ名こそ惜しけれ』と申しかはしける心とさなどは、ただ人の心魂により、歌の道にしほなれぬる位のあらはるるにて候へば、昔今申すにも思ひ及び候はず。今はかかる谷の朽木となり果てて候とも、さるやさしき人々だに候はば、などかは口とくあひしらふこともさぶらはざらむと覚えて、その世の人々羨ましくこそ候へ。[注21]」と、『夜の鶴』最終部で記すが、この部分を記した時の阿仏の心は、この贈答にあったのではないか。この『夜の鶴』最終部に関しては、先学のご論に特に当該贈答との関連を記したものはなく、森本元子氏は「筆者の吐息をそのまま聞くような調子がただよっていて、一種おもしろい結末となっている[注22]」、武井和人氏が「意図的に筆を擱いたのか、それともやむをえずして（例えば、終結を放棄した）こうなったのかは分らないが、まずは未完と見て置きたい[注23]」、簗瀬一雄氏が「この章は追記と見るべきであろう」とされるが、阿仏は当該贈答を思い浮かべつつ、「年を重ねても風情がわかる人がいれば良いものを」とぼかしてはいるものの、為家のいないのを嘆いて筆を置いたと見るのが良いのではないだろうか。阿仏には現在判明するものに限っても九百首ほどの和歌があるが、彼女の他の代表的作品『うたたね』や『十六夜日記』などには当座の返歌はあまり見えない。為家の歌論書に、特に即詠に関する記述はなく、為家の教えを述べると断る『夜の鶴』でわざわざこのようなことを記すのには、なにがしか彼にまつわる思い出を浮かべていると想定する方が自然ではないかと稿者は考える。

二人の思いを結びつけたものは、阿仏尼が抱いた、威厳ある歌人、為家への憧憬や、為家が感じた、阿仏尼の持つ「源氏物語」の造詣の深さへの驚嘆なども当然あったはずである。だが、その中に、今までの二人の研究史では加えられてこなかった、これら全十首の贈答歌の内容をも加えられて然るべきだ、と稿者は考える。この意見をもち、本稿の結びに代えたい。

注1　本稿に引用する和歌は、勅撰集は『新編国歌大観』（角川書店）、私家集は『私家集大成』によった。藤原為家、阿仏尼の作品は、それぞれ、安井久善『藤原為家全歌集』（武蔵野書院、一九六二年）、簗瀬一雄『校註阿仏尼全集 増補版』（風間書房、一九八四年）も参照した。なお、阿仏尼『夜の鶴』は、冷泉家時雨亭叢書『続後撰和歌集為家歌学』（朝日新聞社、一九九四年）によった。『阿仏仮名諷誦』は、前掲簗瀬書、P188。『玉葉和歌集』については、岩佐美代子『玉葉和歌集全注釈』（笠間書院、一九九六年）、『風雅和歌集』は、次田香澄・岩佐美代子『風雅和歌集 中世の文学』（三弥井書店、一九七三年）も参照した。『源氏物語』は、日本古典文学大系（岩波書店）、鎌倉時代物語は、市古貞次・三角洋一編『鎌倉時代物語集成』（笠間書院）によった。これらについては、稿者が表記を改めた箇所もある。傍線なども、稿者が私に付し

たものである。

2 『日本歌学大系』第四巻、P45。

3 田辺「『安嘉門院四条五百首』攷――『十六夜日記』との関わりを中心に――」「和歌文学研究」第75号、一九九七年十二月、P24。

4 冷泉家時雨亭叢書『冷泉家古文書』「1融覚藤原為家譲状文永五年十一月十九日」（朝日新聞社、一九九三年）P9。なお、佐藤恒雄「藤原為家の所領譲与について」『中世文学研究――論攷と資料――』中四国中世文学研究会編（和泉書院、一九九五年）P111～112、132に負ったところが多い。ここに記して謝意を表したい。また、定覚の出生については、井上宗雄氏は正嘉二（一二五八）年かとされる。（『鎌倉時代歌人伝の研究』風間書房、一九九七年、P260）。

5 佐佐木信綱編『飛鳥井雅有日記』古典文庫、一九四九年、P31。

6 岩佐『玉葉和歌集全注釈』下巻・P243。

7 佐藤恒雄「藤原為家の鎌倉往還」「中世文学研究」第23号、一九九七年八月、P114～116。

8 玉井幸助・石田吉貞、日本古典全書『海道記・東関紀行・十六夜日記』（朝日新聞社、一九五一年）P209～210、福田秀一『中世和歌史の研究』（角川書店、一九七二年）P202、松本寧至『中世女流日記文学の研究』（明治書院、一九八三年）P122～123、久保田淳・島内裕子編『中世の日本文学』（放送大学教育振興会、一九九五年）P63～64、井上宗雄「冷泉家の歴史（三）」「しくれてい」第53号、一九九五年七月、増淵勝一「いとしいとしといふ心」「湘南文学」第9号、一九九六年一月、P42～43、長崎健・濱中修『日本の作家シリーズ22・阿仏尼』（新典社、一九九六年）P64～66、井上『鎌倉時代歌人伝の研究』P274～275など。

9 座談会「和歌文学研究の問題点」「国学院雑誌」第96巻1号、一九九五年一月、P41。

10 前掲8、久保田・島内書、P64。

11 *『玉葉集』為家詠・全五十一首（――は出典不明歌、▒▒は当該贈答歌）○題詠…三十六首「古今六帖・若菜」15、「余寒」29、「春雪」32、「春」106、221、「卯花」303、「五月五日」348、「五月雨」356、「七夕」464、「萩露」503、「雁」584、585、「名所月」656、「月」720、1995、2002、「秋雨」772、「冬」910、936、957、1009、「雪」986、「仏名」1024、「歳暮」1025、「池水久明」1071、「旅泊」1236、1239、「古今六帖・ことの葉」2448、「初言恋」1358、「寄弓恋」1436、「古今六帖・日頃隔てたり」1480、「古今六帖・口がたむ」1519、「恋」1595、「絶恋」1750、「岡雪」2041、「山」2229、「続古今集の撰者追加の述懐」2536、「釈教歌の中に」2693　○題知らず…六首（861、1194、1259、1681、2084、2592）○贈答…五首（1456、1488、1526、1688、2046）「女につかはしける」（阿仏か）1488、「わづらふこと侍りけるが、おこたりて後久しくあはぬ人につかはしける」1526、「日吉社に参りて雪の降り侍りければ、法印源全がも

とへ詠みてつかはしける」2046〇独詠…二首（1885、2211）「老いの後病に沈み侍りける頃、花の盛に住み侍りける家の前を車のあまた過ぎけるを聞きて」1885、「嵯峨の家に年久しく住みて詠み侍りける」2211、阿仏詠・全十一首〇題詠…三首「七夕」466、「不逢恋」1320、「恋」1741〇題知らず…一首（624）〇『十六夜日記』より…四首（1134、1135、1184、1216）〇『阿仏仮名諷誦』より…一首（2430）〇贈答…二首（1457、1689）

*『玉葉集』恋二・恋四における恋の場面の詠歌（「題知らず」歌は除く、▒は当該贈答歌）〇恋二…二十首・1363円融院、1372よみ人知らず、1373相模、1375よみ人知らず・俊成へ、1378円融院、1387小侍従、1396藤実方、1415道綱母、1422藤家経、1423醍醐帝、1424藤能子、1452俊成、1453よみ人知らず、1455村上帝、1456為家、1457阿仏、1461和泉式部、1476同、1481よみ人知らず、1483源訥子〇恋四…四十六首・1611道綱母、1612敦忠、1613雅子内親王、1614業平、1615長雅、1617よみ人知らず、1618小馬命婦、1619よみ人知らず、1620経盛、1621よみ人知らず、1622村上帝、1623徽子女王、1625小町、1626俊成、1630道綱母、1631和泉式部、1632伊勢、1633道長、1634小侍従、1635よみ人知らず・謙徳公へ、1636醍醐帝、1637家持、1639山口女王、1646朝光、1647定頼、1649道長、1650清慎公、1652光孝帝、1653弁乳母、1654道綱、1655相模、1660建礼門院右京大夫、1661平経正、1664弁乳母、1665よみ人知らず・兼輔へ、1666兼輔、1668定頼、1677よみ人知らず・謙徳公へ、1678実方、1688為家、1689阿仏、1691和泉式部、1701道信、1711道綱母、1721匡房、1722実方

*『風雅集』為家・全二十六首〇題詠…二十一首『為家千首』「若菜」18、「春」99、134、「秋」452、「恋」1128、1168、1777、『宝治百首』「梅薫風」80、「首夏」303、「待郭公」314、「夕立」406、「旅宿」954、「寄虫恋」1318、「夜灯」1673、「浦舟」1844、『五社百首』住吉「炭窯」876、春日「初雁」554、北野「ともし」1522、伊勢「残雪」1416、『禅林寺殿七百首文永二年』「岡花」185、「稲妻」575〇贈答…五首（985、1096、1101、1104、2086）985「建長五年五月後嵯峨院に三首」、2086「前大僧正良覚、横川に如法経かき侍りけるに、天長の昔まで思ひやらるるよし申すとて」阿仏・全十四首〇題詠…四首「苗代」263、「暁」903、「早蕨」1441、「野」1597〇題知らず…二首（42・875）〇『安嘉門院四条五百首』より…三首（「萩」477・「忍逢恋（出典は「後朝恋」）」1113・「関」1894）〇贈答…三首（1097・1102・1105）〇為家死後…二首（2005・2006）

*『風雅集』恋二における恋の場面の詠歌〇十首・1055四条太皇太后宮下野、1092隆信、1093よみ人知らず、1096為家、1097阿仏、1101為家、1102阿仏、1104為家、1105阿仏、1133和泉式部

12 久保貴子「『宗尊親王三百首』と阿仏尼」「実践女子大学文学部紀要」第39集、一九九六年三月、P24。

13 『公卿補任』弘安二（一二七九）年の為氏の項、「十二月四日服解（母）」。

14 岩佐「玉葉集と風雅集」「中世の和歌　和歌文学講座

第七巻』一九九四年、勉誠社、P97。

15 前掲1、安井書、P611～612。

16 『玉葉集』・雑一・2041・「老いの後病に沈みて侍りし冬、雪の夜、前大僧正道人々数多伴ひ来たりて題を探りて歌詠み侍りし中に、岡雪といへることを詠み侍りしを、筆取ること叶はず侍りて、為兼少将に侍りし時書かせていだし侍りし」・為家・「いかにして手にだに取らぬ水茎の岡辺の雪に跡をつくらん」。

17 前掲1、簗瀬『校註阿仏尼全集増補版』P69。

18 次田・岩佐『風雅和歌集』P227。

19 平岡武夫・今井清編『白氏文集歌詩索引下』同朋社出版、一九八九年、P137。

20 前掲8、長崎・濱中『阿仏尼』P65。

21 前掲1、冷泉家時雨亭叢書、P519。

22 森本元子、講談社学術文庫『十六夜日記・夜の鶴』一九七九年、P223。

23 簗瀬一雄・武井和人『十六夜日記・夜の鶴注釈』和泉書院、一九八六年、P447。

付記　本稿は、平成十年度中世文学会春季大会（於立正大学）での口頭発表に基づいております。ご指導並びにご教示をちょうだいした諸先生に、心よりお礼申し上げます。

（本学大学院博士課程）